

式は舞姫二五名の舞があり、田植えが早乙女が左右の献穀田に五人
ずつ入って田を植える。(歌姫は二五名)

奉耕者、江口平六氏の謝辞があり、奉祝歌合唱して閉式となる。

奉祝歌 吉村正一作詞

一、筑紫の野辺の水上の清き流れとみそそぎて、美し田の地しづ淨
め今日しも壽ぐ御田植。

二、あやに畏し天皇の天地の神新嘗の、御祭り料御饌御酒を誠心こ
めて御田植。

三、聖の君の大前に捧げまつらふ大御饌と、みそぎ清めて民草の八
千代祝いて御田植。

また御田植歌は吉村正一作詞、深川常範振付であったが、歌詞は省
略す。ほかに、献穀田の御拔穂(稲刈)式のためにも、同氏の作詞があつて、御田植祭式と同様に神々しく厳か
に取り行われた。

ともあれ、奉耕者、江口平六氏にとっては勿論、村役場・農会その他の関係者にとって、非常な名誉なことであつたが、同時に責任の重い大役であつたに違いない。

三 水田裏作(冬作)

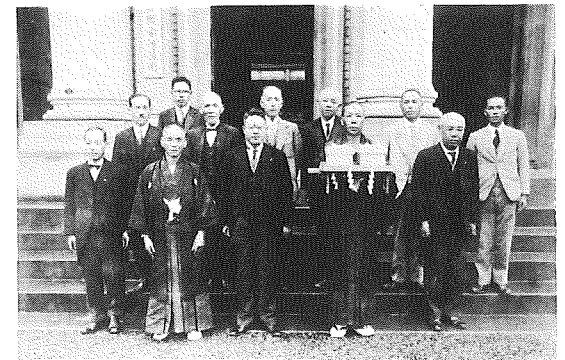
農地に畑の殆どないクリーク地帯では、冬作というのは水田裏作である。藩制時代から、大正末に機械灌漑が完成し、三化めい虫防除の晩稲一期作が普及するまでは、早・晩二期作の晩稲の跡地は、次の年の早稲が植えられるわけだから裏作は出来ない。それに、泥土揚用の田と、苗代用の田は休閑するから裏作率は低い。

県農業史には、川副郷における幕末の経営面積は、ほぼ、一戸当たり一町を上下し、裏作率は五四―六四%であるとしてある。

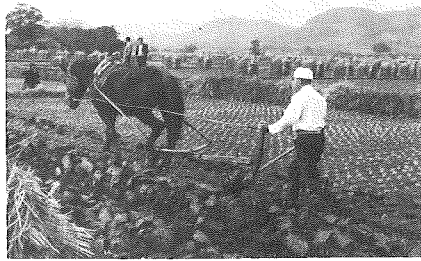
安政四年の川副郷目安(前述)には、夏作物の夏大豆・秋大豆・夏小豆・秋小豆・木棉・冬作物として、唐豆(蚕豆)・稗麦・小麦・大麦・辛子(なたね)・蕎麦の十一種が栽培されていると記されているが、川副郷の干拓地を含むとある。

類 (一) 麦 類

地下水が低くない平坦地の、しかも水田裏作という土壤条件に加えて、成熟期に梅雨を経過することは、病害



献穀(米一升、粟五合) 県庁到着
(捧げるのは平口平六氏)



水田裏作の準備 (麦畦作り)

佐賀平坦部の土壌は重粘土で、稲株を目安にしながら、羊かんを切っていくようにして、それに馬鋤をかけても土塊は細かにならず、手作りのクレワイ（塊割り）で碎く作業が必要で、長く続けると竹製の柄を握りしめた手の指が伸びないばかりか、叩きつける衝撃でヒビ・アカギレが裂け、血が滲んでクレワイの柄を染めたという。麦畦の蒔き溝は、畦に直角に切る横雁木（横畦）で鋤で浅く切る様式で、昭和の前期まで残っていた。千歯や麦打台（小麦用）に頼るほかなかった脱穀過程に、待望の足踏み回転脱穀機が、大正八年（一九一九）に登場し、普及した。

次いで土塊を切つて塊を小さくする飛行機馬鋤が出て、麦畦の碎土が容易になり、加えて麦踏みローラー、麦畦の蒔き溝作り（アネキイ）が普及し、横雁木から二条畦の栽培様式となった。これらの農具は麦作の労力を大幅に減少し、麦類栽培面積拡大に結びついていった。

こうした農機具の普及には、大正十一年（一九二二）から始まった県立農事試験場（現県農業試験場）の参観デーが、大きな役割りを果たしたといえる。

佐賀平坦は米の生産力の高い地帯で、農民は、おのずから、稲作への生産意欲ほどのものが裏作へは見られない。しかし大正末期に晩稲一期作に統一され、水田の輪作体系を安定させた。

水田の二毛作体系は、普通、次の通り。

表19 佐賀郡麦作付面積の推移
(明治末～昭和前期)

(単位：町)

	大 麦	稗 麦	小 麦	計
明治31年	378.8	990.0	3082.6	4451.4
明治35年	397.0	1146.1	3617.7	5160.8
明治37年	442.4	1065.6	3870.8	5378.8
大正元年	298.3	1001.0	3383.8	4683.1
大正4年	265.1	1314.4	3388.7	4968.2
大正10年	322.0	796.0	3036.6	4154.6
大正14年	354.4	570.4	2462.4	3387.2
昭和元年	418.9	567.6	2641.5	3628.0
昭和4年	462.2	552.6	3317.3	4332.1
昭和8年	655.7	491.5	3409.1	4556.3
昭和11年	618.0	375.6	4248.6	5242.2
昭和13年	860.3	301.5	4918.9	6080.7

「佐賀統計書」による

と湿害につながり、麦類の栽培に適した環境ではないが、古くから栽培されて、それなりに農民の知恵と努力によって続けられている。

麦作は水稻の刈取り、稲小積み作りの終わり次第、稲小積み所だけ残して、耕耘が始まる。麦畦作りにも高度の馬耕技術が駆使される。

表20 犁 耕 の 順 序 (裏作麦)

作 業 名	農 具	備 考
ひらすき	うすき (はえ犁)	稲刈株を目安にして細く犁耕
まがき	馬 鋤	ひらすきのあとを馬鋤で崩す
荒ふさぎ	くれ割い	さらにクレワイで叩き碎土
むねたて	くれがえし犁	麦蒔きの畦立を行う、この犁で大きく反転す
むねふさぎ	くれ割い	麦蒔に備えて畦面を細く叩き碎土、均平化
あねきり	鋤	蒔溝は横畦(ヨコガンギ)を鋤で浅く溝を切る
堆肥、播種		種麦をまき堆肥をのせる

「荒ふさぎ」は省略することがある。
麦畦は排水をよくするため高い畦を作る。

(川副町誌)

稲—蚕豆か菜種—稲—休閒かレンゲ—稲—麦 類
 稲—麦 類—稲—蚕豆か菜種—稲—休閒かレンゲ
 稲—休閒かレンゲ—稲—麦 類—稲—蚕豆か菜種

1 大麦（皮麦・裸麦）

佐賀平坦では皮麦を大麦といい、子実とエイ（穎）とが分離しやすい種を裸麦という。皮麦は、六条大麦種が作られて、味噌・醬油の原料になるが、当町では殆ど、農馬の飼料用として栽培された。裸麦は、押し麦（圧麦）にして、混食用として栽培され、町内に専用の山崎精麦所があった。大麦と裸麦は、もともと、自給作物であり、明治中・後期に漸減し、裸麦は増加し、両者の面積が逆転した。この傾向はつづき、のち昭和初期に大麦作が伸び明治末期の二倍余に達した。（表19）

裸麦は昭和年代（大正末に急減）引き続き減少した。

諸富町においては（東川副村誌）、佐賀郡と同様に、昭和前期に著しく増加していった。（表21）

2 小麦

小麦は、長崎を通じての外国輸出と、素麴原料として商品性の高い作物であった。しかも、大麦・裸麦よりも耐湿性も強く、播種期の幅が広く、佐賀郡の裏作には圧倒的に、多く栽培された。昭和四十年（一九六五）代からのビール用大麦（二条大麦）栽培が普及するまでは、佐賀郡の中心は小麦であった。

表21をみても、小麦作の伸展は昭和七年（一九三二）の国の小麦増殖奨励規程公布（一〇町当たり二円の奨励補助など）による五カ年計画の作付増大によるものである。

諸富町（東川副村・新北村）の平均小麦は郡平均を上回る位置にある。

小麦増殖奨励事業として、小麦の品種改良のための育種事業が進み、農林省直轄の育種事業所（小麦改良実験所）が、県農事試験場内に併設され、昭和十一年に小麦農林二〇号、次いで同十四年、小麦農林三四号などの優良品種が次々に育成され、奨励品種となって普及した。

戦後、小麦育種史に残る小麦農林六一号の名品種が出て、急速に全県下に普及された。

表21 東川副村昭和2年～昭和13年、大麦小麦収量推移

区 分	小 麦				大 麦			
	付別 作反	量 収	当量 反収	当価 石単	付別 作反	量 収	当量 反収	当価 石単
昭和2	町 97.6	斗 1,757	斗 18.0	円 17.5	反 102	石 193	斗 19.0	円 12.50
3	97.0	1,840	19.0	18.0	152	289	19.0	12.20
4	119.0	2,271	19.0	13.5	275	523	19.0	8.80
5	96.5	1,504	16.0	12.0	305	438	14.5	7.00
6	119.15	1,972	16.5	6.5	413	619	15.0	4.20
7	142.4	2,164	15.2	8.2	481	722	15.0	6.00
8	138.1	1,657	12.0	14.0	480	720	15.0	8.75
9	147.7	1,920	13.0	12.6	395	632	16.0	7.65
10	167.4	2,561	15.3	12.9	437	699	16.0	7.89
11	177.6	2,522	14.2	18.0	480	754	15.7	8.75
12	177.8	2,507	14.1	21.0	479	748	15.5	10.20
13	195.9	2,508	12.8	23.7	372	595	16.0	13.75

（東川副村誌）

(二) 蚕豆 (トウマメ)

米づくりが早・晩二期作であった時代は、早稲を十月上・中旬に刈取りをし、跡地に蚕豆を蒔いてから、日峯さんのお祭りに出掛けたといわれる。

裏作蚕豆の作付面積は大正初年、県内で四、〇〇〇〇五、〇〇〇町歩の水準を昭和七年(一九一八)まで続けた。それが、その後、半分以上に減ってしまったのは、大正末期の水稲移植期繰下げが行われ、晩稲一期作となり、蚕豆の播種期が遅れることが一つの原因で、それに、金肥施用の増加により、地方維持的な蚕豆より、小麦の栽培のほうが高経済性が高く、また、昭和三年ごろから、蚕豆象虫が発

表22 東川副村昭和2年～昭和13年、稈麦、蚕豆収量推移

区 分	稈 麦				蚕 豆			
	作付反別	反当収量	収 量	石 単 当 価	作付反別	反当収量	収 量	石 単 当 価
昭和2	反20	斗17.0	石34.0	円14.00	町73.0	石1.38	斗94.9	円12.00
3	100	17.0	170.0	14.00	71.0	1.70	120.7	12.50
4	65	17.0	110.5	13.00	71.2	1.70	121.0	11.30
5	42	12.5	52.5	9.25	75.5	1.65	124.6	9.30
6	92	12.8	117.7	6.10	66.5	1.60	106.4	6.50
7	92	12.0	110.4	7.00	69.8	1.20	83.8	7.50
8	90	12.0	108.0	11.25	68.4	1.22	83.4	13.00
9	68	14.0	95.0	10.40	46.8	1.24	58.0	13.60
10	89	14.0	124.6	10.80	43.2	1.20	51.8	13.20
11	101	13.8	139.4	13.75	41.2	1.22	50.2	14.00
12	102	13.6	138.7	15.50	41.7	1.36	56.7	9.50
13	80	13.4	107.2	17.40	38.6	1.30	50.8	10.00

(東川副村誌)

生し広く被害を受けたための減少もあった。

諸富町では、昭和九年から(表22)減少している。併せて、反当収量が七年から低下を続けている。今、石当たりの低価額を昭和前期でみると、(表17・表21・表22参照)

- 蚕豆 昭和五・六・七年
- 稈麦 昭和五・六・七年
- 大麦 昭和四・五・六・七年
- 小麦 昭和五・六・七年
- 米 昭和五・六・七・八年

各作物とも、昭和六年は最低価額年で、昭和六年(一九三一)は経済不況(経済恐慌)といわれ、農産物の暴落があつて、農家経済にかつてない打撃を与えた。

昭和十年ごろから、播種期を早めるために、水落ちの済んだ水稲の立毛の中に種子を蒔く、「くぐりまき」が、工夫され、専用のマメツクイグワ(片手で使える小型鋤)が登場して栽培されるようになり、蚕豆象虫の防除にはクロールピクリン燻蒸が考えられた。

蚕豆は佐賀県の特産物として昭和十六年(一九四二)に三、七九四町歩まで面積が延び、その生産額を誇った。とくに、諸富町・川副町に栽培される蚕豆の子実は大粒種で、「川副在来」として分類されて称せられ、種子としての需要は全国的であつた。

蚕豆は脱穀の方法が、刈取し、地干したものをイマナキ(莖)に拡げて、両方から向き合つて、二米余の櫛棒

で叩き、下に敷いている縄を両側から引張ると、蚕豆が反転され、また叩き続ける。あとは風選して終わる。蚕豆は馬の飼料にするため、ウウガマサン（おおかまど）で炊き、冬の夜など、家族はそこで煖をとった。農村では煮豆として茶請け、豆祇園などに欠かせないもので、その素朴な風味は今も舌に残っている。以前は小豆の代わりに用いられたが、今日では餡物にも使われなくなり、農馬も農村から姿を消し、僅かに蔬菜用蚕豆として栽培されるに過ぎない。

(三) なたね (菜種・芥子)

菜種は油をしぼり、貴重な脂肪源として食用とし、灯用として古くから栽培された。また、搾り粕は油粕といわれ、秀れた有機質の肥料であった。

菜種油は油搾りの業者に子実四升をもって油一升とを交換したが其の後、条件は悪くなったといわれる。

菜種は商品作物で、九州では菜種栽培が盛んであり、佐賀平坦では、とくに水

表23 東川副昭和前期の菜種作の推移

	作付別 反	収量 石	価額 円	反収 斗	当量 斗	当価 円
昭和2	116	92.80	1,392	8.00	1.50	
3	160	144.00	2,304	9.00	1.60	
4	175	196.00	3,724	11.20	1.90	
5	44	48.40	580	11.00	1.20	
6	42	48.00	456	11.50	0.95	
7	45	80.00	920	17.78	1.15	
8	54	65.00	760	12.02	1.17	
9	45	56.25	664	12.50	1.18	
10	42	53.76	648	12.80	1.19	
11	48	64.32	797	13.40	1.24	
12	48	63.84	1,277	13.30	2.00	
13	39	45.50	933	13.00	2.05	

昭和5年作付面積の落ち込み、それが続いた。(東川副村誌より)

田裏作として佐賀・神埼両郡に多かった。

植物分類的に、菜種には普通種・朝鮮種などのナプスと、和種・在来種などのキャンペストリスという二つの種がある。

古くから栽培されていたのは、ワガラシ（和辛子）と呼ばれるキャンペストリス種で、幼植物は食用（主に漬物）にした。

開花、成熟が早いという長所はあったが、普通種のナプス種に比べて病気に弱く、収量や油の含有量も少ないので、今日では、ナプス種とキャンペストリス種との交雑育種によって、ミチノクナタネ（農林二〇号）などの品種が登場して、普及したが、食用油としても安価な大豆などにおされ、菜種栽培が天候の不順下での収穫作業の困難性、など労多くして利益の少ないことも原因で、あの見渡すかぎり菜の花が咲き盛り、目を楽しませてくれた風景は、もはや見られない。

(四) 緑肥作物

早・晩二期作（稲作）の慣習から、裏作は約半分が休閑されたから、これに緑肥作物が栽培されたのは、比較的早く、山野草の乏しい平坦地の水田では、地力維持の役目を果たした。

明治三十七年（一九〇四）、県の水田面積の一割四分ほどが栽培されたが、その多くが平坦地方であった。その平坦地方では四割程度の緑肥作物が栽培された。

ところが、日露戦争のために、安い大豆粕の輸入が絶えそうになったので、泥土・堆肥などの自給肥料の増産とともに緑肥作物を奨励した。

県は郡町村農会を通じて、レンゲ（紫雲英）・緑肥大豆の種子を国の補助によって、無償配付して、その栽培を奨励、指導した。

緑肥作物には青刈蚕豆も含まれて、収量を上げた。

日清戦争・第二次大戦と、戦いのあるたび毎に、共同作業、自給肥料増産などの奨励指導はくり返えされたものである。緑肥作物は青刈（莖葉）の収量の多い品種が選ばれ播種期を早目にし、莖葉を繁茂させ、水田作業前に鋤込んだ。化学肥料が出回るにつれて、また減少していった。

四 その他

大豆

畑のない当町では、殆ど畦畔に作られ、アゼマメと呼ばれた。草丈の低い（秋大豆）品種が水稲への影響が少ないので好まれ、収量はあがらなかった。戦後は品種改良が進み、葉丈は低く多収の品種が作出されたように、県の大豆制品改良も草丈が低く、多収で、良質（蛋白質含量の高い）を育種目標にした。

一時は、水稲の除草剤二四Dが出て、広く普及し、この農薬が広葉雑草を枯死させるので、畦畔大豆は大幅に減少していった。

大豆は自給作物で、豆腐替え・自家製の味噌・醤油・或いは炒った大豆を石臼でひいてキゴ（黄粉）を作るなど自家消費のためであったが、良質の植物性の蛋白質で、農村の貴重な蛋白質源であった。

昭和五十三年（一九七八）の水田利用再編対策事業によって、佐賀平坦における大豆作は畦畔から下りて本田で、広面積に栽培され、完全に商品作物に成長している。

その他（大豆）

表24 昭和前期緑肥作物（青刈作物）の推移

（単位：貫）

区分	紫雲英		蚕豆		青刈大豆		合計	
	反別	収量	反別	収量	反別	収量	作付反別	収量
昭和1	12				60	43,000	72	50,200
2	12	7,200			60	42,000	72	49,200
3	15	9,000			70	49,000	85	58,000
4	16	9,600			80	40,000	96	49,600
5	18	10,800			95	47,500	112	58,300
6	—	—	333	182,000	399	179,500	731	362,100
7	25	10,000	280	168,000	225	90,000	530	268,000
8	23	10,400	276	164,200	231	98,210	530	272,810
9	20	9,080	246	147,600	24	9,996	290	166,676
10	18	8,100	240	144,000	26	10,860	284	162,960
11	24	11,040	248	148,800	32	13,430	304	173,270
12	27	10,500	256	87,380	35	10,800	319	108,710
13	124	49,600	171	59,850	81	34,000	376	143,450

レンゲはフウソウと呼ばれ、作付面積は緩いカーブで増加したが、昭和13年戦時体制のきざし濃く急増した。（東川副村誌）